

# ドイツサッカー界に見る“ゼロキャリアサポート”

——ドイツサッカー協会 (DFB) 認定エリート学校と  
プロサッカークラブの取り組み——

瀬 田 元 吾

## **“Zero Career Support” Seen in the German Football World: The New Cooperation Scheme from German Professional Football Clubs and the Elite School Approved from the German Football Association**

Gengo SETA

A quarter of a century has passed since the J-League, a professional football league, was established in Japan and Japanese football has continuing to grow, yet many professional football players have a big difficulties with “second career” after they retire as active players. That is not only an issue in Japan, and it is also a problem of the football world. It is very important to pre-consider future possibilities and which kind of educational environment one should prepare for prior to starting a professional career. After the disastrous result of the European Championship in 2000, the German football association (DFB) had established a new scheme, which cooperates professional football clubs and the elite schools approved by DFB, to discover and develop new talents. It was a huge revolution for German football, and it shows a significant improvement. This could be a very helpful reference for the Japanese football world. Author deliberates on how to advance the school education at the state of “zero carrier”, before starting a “first career” as a football professional player in Japan.

Key Words : youth academy (ユースアカデミー), regional team (リージョナルチーム), DFB elite school (DFB エリート学校), trinity (三位一体), humanity education (人間教育)

### 序——研究課題

日本人におけるプロサッカー選手第1号は、1979年にドイツに渡り、1.FCケルンでプロ契約を結んだ奥寺康彦である。奥寺はさらに日本に帰国後、1985年に当時日産自動車(現横浜Fマリノス)に所属していた木村和司とともに、実質的なプロサッカー選手である「スペシャルライセンス・プレーヤー」としての登録を承認され、翌年より日本サッ

カーリーグ (JSL) で日本国内初のプロ選手としてプレーしている<sup>1)</sup>。

その後、1993年に日本プロサッカーリーグであるJリーグが創設されると、日本にも多くのプロサッカー選手が誕生するようになった。これは日本でもプロサッカー選手という職業が確立したことを意味しており、このプロ化により国内におけるサッカーの人気は飛躍的に向上し、“メジャースポーツ”としての地位を確立したと言っても過言ではない。これによりサッカー選手は、他のスポーツ種目のアスリートと比較すると、経済的に優遇される存在になったとすることができるであろう。

しかし一方で、他の多くのスポーツ種目のアスリートらと同様、サッカー選手も選手寿命というものは決して長くない。事実、Jリーガーの平均引退年齢は25、26歳と言われており、将来に向けた十分な蓄えを作ることができる選手はそのほんの一握りである。引退後に解説業やコーチ監督業で成功するケースもあるが、それが誰にでも当てはまるセカンドキャリアではない。2000年度に日本プロサッカー選手会 (JPFA) が実施した「JPA (現JPFA) 選手包括調査」の中で、プロサッカー選手のセカンドキャリアに対する意識を調査したところ、「現役引退後の生活に不安を持っている」と回答した選手が (J1, J2 合わせて) 76.2%となったことから、彼らが自らのセカンドキャリアに大きな不安を抱えていることがわかる。ところが「既に引退した後の就職活動プランを立てている」選手は20.2%であったことからわかるように、多くの選手は対処方法がわからないまま不安を抱えてプレーしているのが現状であった<sup>2)</sup>。

光岡 (2014) によると、Jリーグは2002年にキャリアサポートセンター (CSC) を設立し、「引退後のキャリアサポート (選手のセカンドキャリア支援)」と「現役時代のキャリアサポート (現役選手のキャリアデザイン支援)」を柱とした事業をスタートさせている。具体的には、選手らの状況に応じて、1. カウンセリング、2. 教育プログラム、3. 職業カウンセリングを行うようになり、またJPFAと共同で「Jリーグ合同トライアウト」を実施することで、プロサッカー選手としての次のクラブを見つけるサポートにも注力するようになった。

しかし2009年に日本での移籍金制度が大きく変化した結果、移籍金を原資にしていたCSCによるセカンドキャリア事業は、縮小を余儀なくされることとなる。そこで2010年以降は、若手向けの社会人教育に注力するようになり、主にJクラブ加入3年目までの若手選手らや、アカデミー所属の選手らを中心としたキャリア教育に重点を置いた活動を行

---

1) 高橋潔・重野弘三郎 (2010) 「Jリーグにおけるキャリアの転機—キャリアサポートの理論と実際」『日本労働研究雑誌』52巻10号、20ページ。

2) 光岡奈緒 (2014) 「プロサッカー選手のセカンドキャリア—諸外国と日本のプロサッカー選手のセカンドキャリア支援事業—」『国際経営・文化研究』18巻2号、67-78ページ。

うようになった。また文部科学省の委託事業であるキャリア・デザイン・サポートプログラム「Jリーグ版[よのなか]科」を受託し、ユースアカデミーに所属する未来のプロサッカー選手らにキャリアデザインを学ばせ、彼らの職業観を育てるサポートにも注力してきた<sup>3)</sup>。こうしたCSCの取り組みは、先進的なキャリアサポートのモデルケースとして、2008年にはFIFAのオフィシャルサイトで紹介されるなど一定の評価を受けている<sup>4)</sup>。しかしその後、CSCとしての活動は2013年3月で終了となり、組織自体も解体されることとなった。

Jリーグによると、2014年4月より管理統括本部企画部内に人材教育・キャリアデザインチームを設け、これまで行ってきた業務を集約することにし、Jクラブとともにトップチームからアカデミーに至るまで、選手のキャリアデザイン支援業務に取り組むことを目標として、活動を行っていくこととした。具体的には、プロまたはプロを目指す選手に必要な教育研修業務、就学支援業務、セカンドキャリア支援窓口業務を行っている。さらに若手選手を中心とした現役選手への教育については、Jリーグ全体の共有化を図る必要性の高いものを中心に、Jリーグに所属する選手として必須とされるものについて、教育内容を標準化した上で、各クラブの要望に応じて講師派遣等を実施している。しかし実際は、資金力のないJ1クラブを含む多くのJ2クラブ、さらに2014年に新設されたJ3リーグに所属するクラブでは、経済的な理由から十分なプログラムが準備されていないのが現実であり、セカンドキャリア問題は今もなお、日本サッカー界における重要なテーマであることは間違いない。光岡(2014)はこのセカンドキャリアの問題について、育成年代から現役時代、そして引退後といった包括的、長期的な取り組みが必要であることに言及するとともに、そのための「キャリア意識」は、育成段階で養成されなくてはならないことを指摘している。

そこで本研究では、2000年の欧州選手権で惨敗したドイツが、2001年からスタートさせた「育成改革」の中で、非常に大きな比重を置いてきた「教育」の部分に着目することとする。そしてドイツサッカー協会(DFB)と2000年に設立されたドイツプロサッカーリーグ有限会社(DFL)が作った新しいガイドラインの下、ドイツのプロサッカークラブとその地域の教育機関にどのような関係性が作られ、そしてサッカー界のタレント選手たちにどのような教育を提供し、そして彼らの将来に向けた“ゼロキャリアサポート<sup>5)</sup>”を

3) Jリーグホームページ:「百年構想と各種活動」キャリアデザイン支援 <https://www.jleague.jp/sp/100year/cultivation/>

4) FIFA ホームページ (2008): “Das Leben nach der Karriere” <http://de.fifa.com/live-scores/news/y=2008/m=3/news=das-leben-nach-der-karriere-713300.html>

5) 筆者の造語であり、タレント選手らの将来の選択肢を増やすために育成年代における学校や

行っているかに焦点を当てることとする。その上で、日本の育成年代における教育の現状を踏まえ、今後の日本における“正しい教育環境”の整備の重要性と必要性を提案していくこととする。

そこで最初に、ドイツ特有の教育システムとそれが近年どのように変化してきているかについての先行研究を踏まえ、ドイツ人と日本人の進学や就業についての意識や価値の違いを明確にする。そしてドイツのサッカー界が、DFBとDFLを中心にどのようにしてタレント選手たちに教育を提供し、そして人間形成を行っているかを詳しく知るために、現在(2018/19シーズン)ブンデスリーガ1部リーグに所属するフォルトゥナ・デュッセルドルフ(以下、フォルトゥナと略称)と、その提携学校を事例として取り上げることとする。フォルトゥナは1933年にドイツサッカー選手権で優勝した経験を持ち、1979年・1980年にはドイツ杯連覇を果たすなど、ドイツを代表する古豪クラブの1つである。その一方で、1998/99シーズンにレギオナルリーガ・ヴェスト・ズードヴェスト(当時のドイツ3部リーグ)に降格してからの10年間、アマチュアリーグに所属する時代を過ごしている。その後、2008/09シーズンにブンデスリーガ2部昇格を確定させたのち、ブンデスリーガ1部・2部に所属するために必要なライセンスを取得するために、地域の学校とパートナーシップを構築し、これらの学校は後にDFBエリート学校としての認定を取得することに成功している。今回は本研究のために、フォルトゥナの提携している学校との関係性を参考に、フォルトゥナのスクールコーディネーターを務めるクリスチャン・ラッシュ(Cristian Lasch)の協力を得ながら、これらの学校とフォルトゥナの具体的な取り組みを明確にしていくこととする。

## I ドイツの教育システム

先行研究のレビューを通じてまず、ドイツの伝統的な教育システムを明確にし、日本における教育システムとの違いを認識する。その上で、ドイツの教育界が抱える問題点と、それに伴う教育改革を明確にしていくこととする。

なお、本文中で繰り返し使用する用語についてはアルファベットを使用した省略形を使用するため、既出のものも含めてあらかじめここにまとめておく。

- ・DFB：ドイツサッカー協会
- ・DFL：ドイツプロサッカーリーグ有限会社
- ・VDV：ドイツプロサッカー選手組合

---

クラブ、地域サッカー協会による様々なサポート体制を指す。

- ・ FIFPro：国際プロサッカー選手会
- ・ NLZ：ユースアカデミー
- ・ NRW：ノルドラインヴェストファーレン州

### 1. ドイツの伝統的な三分岐型中学校制度

日本の教育システムは、第二次世界大戦後に大きな学制改革が行われ、六・三・三・四制の“単線型”教育制度を採用することとなった。そのうち小学校の6年間および中学校の3年間を合わせた義務教育の9年間は、ほぼ同一のプログラムで構成されており、一般教育に重点を置かれていると言えることができる。一方現在のドイツは、16州（旧西ドイツ11州、旧東ドイツ5州）からなる連邦制国家であり、その1つの特色として、教育に関しての権限が各州に委ねられてきたことが挙げられる。そのため各州に日本の文部科学省に相当する省が置かれ、教育に関する事柄は、各州の憲法、学校法、文部省令等によって定められてきた。

州によって例外はあるが、ドイツでは従来、日本の小学校に相当する4年制の基礎学校（Grundschule：第1-4学年）を卒業したのち、中等教育の前期（第5-9/10学年）からは複数の学校種が設置されており、基礎学校の学業成績に基づいて学校からの進言を受けて、学力、能力、適性や将来の職業選択も反映させながら最終的には家庭が判断する形で、ギムナジウム（Gymnasium：第5-12/13学年）、実科学学校（Realschule：第5-10学年）、または基幹学校（Hauptschule：第5-9学年）の3種類のいずれかの学校へ進学するという、“複線型”の三分岐型中学校制度を採ってきた<sup>6)</sup>。

基幹学校は5年制で、卒業後に職業訓練を受ける者が進学することが多く、実科学学校は6年制で、中級の技術者の養成を目指すことになる。これらの学校は、本来は職人を育てることを目的としているのに対し、ギムナジウムは伝統的な大学進学コースであり、全課程修了後に大学入学資格試験でもあるアビトゥーア（Abitur）試験を受け、これに合格することで卒業することができる（アビトゥーアの点数により、進学する大学を選択することができる仕組み<sup>7)</sup>）。なお、木戸（2009）によると、東西ドイツが統一となる以前、東ドイツ側では第二次世界大戦後から日本同様の単線型の中学校制度を採用していたが、ドイツ統一後は、西ドイツ側の三分岐型中学校制度に統一されることとなった。またドイツ

6) 木戸裕（2009）「現代ドイツの教育の課題—教育格差の現状を中心に」『レファレンス』59巻5号、9-32ページ。

7) 卜部匡司（2016）「三分岐型から二分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容」『広島国際研究』第22号、131-141ページ。

では、基礎学校（4年間）の1年目を1クラス（1.Klasse）と表現し、ギムナジウムや実科学校、基幹学校や総合学校に進学してからも、基礎学校からの通し学年で呼ぶため、その後も5クラス（5.Klasse）、6クラス（6.Klasse）、7クラス（7.Klasse）と呼ばれることになる。

## 2. マイスター制度の存在

ドイツには従来、様々な手工業において、その品質や優れた技能・技術の継承するための職業教育制度（マイスター制度）が存在し、これによりクオリティの高いドイツ製品を作り出してきた。そして“手に職を持つこと”に一定のステイタスが存在し、マイスターの資格を保有することで、将来の職を保証される社会であった。

かつてサッカードイツ代表として1990年のW杯優勝に貢献し、その後にドイツ代表監督、アメリカ代表監督等も歴任したユルゲン・クリンスマン（Jürgen Klinsmann）は、パン職人の家庭に生まれたことから、自身もパン職人の資格を取得していたことで知られている。またクリンスマンとともにW杯優勝を経験し、その後は日本の浦和レッズで選手・監督としても活躍したギド・ブッフバルト（Guido Buchwald）も、電気技師の資格を取得している。

このようなケースは決して例外ではなく、ドイツの教育の中ではマイスターの資格を取ることに一定の価値が見出されてきた。しかし近代化が進む中で、EUが掲げるサービスの自由において、ドイツの手工業規制法が、（ドイツのマイスターの資格を持たない）他国の手工業者にとって不利益を被る存在であることを指摘されるようになり、その結果同規制法が緩和されるなど、マイスターの資格の価値が問われるようになっている。

## 3. 三分岐型中学校制度の限界

三分岐型中学校制度については、基礎学校の4年間のみで進学の方性を決めなくてはならないことについて、早期選抜の弊害や社会的格差の助長が問題視されてきた。また基幹学校に進学する子供の多くは手工業者の家庭が多かったが、マイスターの資格の価値が下がったことによる将来への不安が高まっただけでなく、情報社会になったことにより、子供たちの大学進学への関心も強まるようになった。家庭の考え方も大きく変化し、近年はマイスターの資格を取ることに誇りを持っていた手工業者の家庭が減少し、子供の将来の可能性を少しでも広げるために、大学進学資格が取得できるギムナジウムへの進学を希望することが多くなっている。その結果、成績の優秀な子供からギムナジウムに進学し、次に実科学校、そして成績の良くない子供が基幹学校に進むという問題が生じるようになってしまった<sup>8)</sup>。

木戸(2009)によると、これに加えて現代のドイツには、1.旧東ドイツが旧西ドイツに吸収されたドイツ、2.多数の外国人と難民を抱え多民族国家化したドイツ、3. EU 統合に向けて国民国家の枠を超えつつあるドイツ、という三重に交錯した社会構造が存在しており、子供の学力や進学は、親の学歴や収入、移民の背景の有無といった要因に大きな影響を受けている。教育の公正という面からも、こういった社会的な背景に起因する教育の格差をどのように是正していくかも大きな課題とされている。

#### 4. 教育制度の改革へ向けた動き

ドイツは、2000年に行われた経済協力開発機構(OECD)による生徒の学習到達調査(PISA: Programme for International Student Assessment)において、OECD諸国の平均を下回るという現実を突きつけられた(これを「PISAショック」と呼んでいる)ことを契機に、本格的に教育制度の改革が進められることとなった。

具体的には、基礎学校終了時でその後の進学を早期選別しなくてはならない状況を緩和するために、ギムナジウムにおいて基礎学校終了後の2年間をオリエンテーション段階(Orientierungsstufe)とし、2年後にそれぞれの生徒の能力、適正、希望等に応じて、進学する学校を最終的に決定する仕組みを採用したり、基幹学校・実科学校・ギムナジウムの3つの学校形態を1つにまとめた総合学校(Gesamtschule)も作られるようになり、一定の学年までは試験の成績などを考慮された上で、所属するコースを変更することもできるようになるなど、三分岐型中学校制度を見直す動きが活発になっている。

またかつては、大学に進学するためには、ギムナジウムを経てアビトゥーア試験に合格するほかなかったが、近年では基幹学校を卒業後、新しく創設されたベルーフスコレック(Berufskolleg)と呼ばれる新しいタイプの学校に進学することで、中級の職業訓練を受けられるだけでなく、全課程終了後に専門の学科の大学入学資格試験であるファッハアビトゥーア(Fachabitur)試験を受けることも可能になるなど、ギムナジウム以外の教育機関を経由して大学へ進学する道も開かれている。

さらにドイツでは、伝統的な教育形態として半日で学校が終わっていたが、この仕組みの見直しも行われ、学校の終日化が進んだだけでなく、さらには移民の子供を主な対象とする就学前教育の強化を進め、教育課程改革を行っている<sup>9)</sup>。ドイツは16州それぞれに

8) マイスターの資格を取得するためには、原則的には職業訓練学校(Ausbildung)に通いながら、半分学業、半分インターンを行う形で実地経験を積み、最終的に検定試験に合格することになる。従来この職業訓練学校には、実科学校を卒業したのちに進学するケースが多かったが、基幹学校やギムナジウムを卒業したのちに職業訓練学校に入ることも可能である。

9) 岡典子・品田彩子・相賀頌子・宮内久絵(2016)「ドイツにおけるインクルーシブ教育改革へ

教育に関しての権限が委ねられているため、全ての州が足並みを揃えて新しい教育システムを導入することは難しいが、その中で各州の判断で、子供たちの家庭的背景やニーズに応えられる制度へと再編を進めている。

## II DFB と DFL の取り組み

ドイツのサッカー能力に長けた将来性のあるタレント選手を取り巻く環境を理解する上で、学校制度の変化を把握することは非常に重要である。何故なら、タレント選手の育成において DFB と DFL が重要視していることは、競技能力の向上だけでなく、しっかりとした人間教育を行うことであり、各クラブが将来の選択肢を多く持った人材の育成を実現できる環境を整えることが不可欠とされているからである。つまり学校側が色々なケースに対応できる体制へと変化してきていることは、サッカー界から見てもポジティブな流れとすることができるであろう。

そこでまず、ドイツのサッカー界が現在プロサッカー選手のセカンドキャリア問題にどのように向き合っているかを明確にし、その上で、2000年以降にスタートさせた育成改革の中で、DFB と DFL がタレント選手の育成において、学校教育の充実のためにどのような仕組みを確立させてきたのか、そしてそれがどのように機能しているかを検証していく。

### 1. ドイツのセカンドキャリアサポートの実情

プロサッカー選手のセカンドキャリアについては、決して日本だけの問題だけではなく、世界共通のテーマとなっている。ドイツでもプロサッカー選手の約 25% が、引退後に何らかの経済的な問題を抱えていると言われている。約 1,300 人の会員数を誇るドイツプロサッカー選手組合 (VDV: Vereinigung der Vertragsfußballspieler e.V.) は、JPFA も所属している国際プロサッカー選手会 (FIFPro: Fédération Internationale des Associations de Footballeurs Professionnels) には加盟していないが、ドイツのプロサッカー選手のために様々なサポート体制を整えようと尽力している。

特徴的な取り組みの 1 つとしては、契約満了などにより無所属となっている VDV の会員の選手たちを対象として、6 月から 9 月の間、デュイスブルクにあるスポーツシューレ・ヴェダウ<sup>10)</sup> で、無所属選手のみで構成されるチームとしての活動を行っている。こ

---

の模索—社会的・教育的基盤との関連に着目して—」『筑波大学特別支援教育研究』第 10 号、65-68 ページ。

10) ドイツ最大のスポーツ総合施設で、20 を超えるスポーツ競技を行う設備が充実している。特にサッカーに関しては、ドイツ 21 地域サッカー協会が参加する形で、年間 7 回の様々な年代の



ここでは指導者ライセンス保有者によるトレーニングはもちろん、メディカル的なケアなど、限りなくプロクラブに所属しているときに近い環境でトレーニングをしながら、コンディションを保つことができる。このキャンプに参加できる人数には制限があるが、空きができるごとに参加者が補充されることになり、ここに参加できる選手らは新しい契約を得るまで、可能な限り良い準備をすることができる<sup>11)</sup>。そのほかにも引退後、将来的にサッカー業界に携わっていきたい選手へ積極的に多くの情報提供を行っている。さらにVDV自体が提携している5つの私立の大学・教育機関で、通信教育や資格取得が取れるようにサポートするなど、VDVに所属している選手たちの将来への不安の軽減に努めている<sup>12)</sup>。

このように、プロサッカー選手の取り巻く環境の改善に取り組む活動が重要であることは間違いない。しかしその中で最も重要なことは、プロサッカー選手本人が問題を自覚し、自発的に行動をしなくてはならないということであろう。彼らがサッカー選手としてのキャリアをスタートする前にどのような教育を受け、そして人間形成をしてきたかは、その後のプロサッカー選手としての立ち振る舞いや、セカンドキャリアに向けた取り組みへの姿勢に大きな影響を及ぼすことになる。そういった観点からドイツでは近年、プロ選手としてのキャリア（ファーストキャリア）をスタートさせる前の段階、つまり“ゼロキャリア”のサポートを最重要課題としている。

## 2. ドイツ育成改革とユースアカデミー設立

ドイツサッカーは1970年代から1980年代に全盛期を迎え、1990年のイタリアW杯ではドイツ代表（当時は西ドイツ）が通算3度目の優勝を果たしている。これらを反映する形で、1993年から始まったFIFA（国際サッカー連盟）の国別ランキングでは、堂々の1位スタートとなったが、オランダとベルギーの共催となった2000年の欧州選手権では、グループリーグで1勝もできずに敗退してしまった。その最大の要因として挙げられることが、若手の育成が不十分だったことによる世代交代の失敗と言われている。また当時のドイツサッカーの衰退に拍車をかけたもう1つの要因として、1990年代後半からイングランドやイタリア、スペインのリーグを中心に活発になった、世界に向けた放映権の販売

---

トーナメント大会が行われるなど、DFBのタレント育成における中心的役割を担っている場所でもある。

11) VDV ホームページ：VDV-Proficamp <http://www.spielergewerkschaft.eu/index.php?id=12>

12) VDV ホームページ：FIT FOR JOB Fußballpro Ansichten eines “Traumberufs” <https://www.spielergewerkschaft.de/m/m/1/1bcfa.pdf> 13-15 ページ

競争に乗り遅れてしまったことも忘れてはいけない。

そこでDFBは、自国でしっかりとタレントを発掘し、エリートに育て上げていくことと、ドイツ代表が再び世界のトップに返り咲くことを最大の目標として、ドイツ国内のサッカー環境を見直すことを決め、新しい仕組みを構築することを決断した。その中で、ブンデスリーガ1部2部に所属する全36クラブに対して、厳しいライセンス規定を設け<sup>13)</sup>、毎年その規定をクリアしているか審査するリーガライセンス制度をスタートさせることとし、これを審査・管理する組織としてDFLを設立した。DFLはそのほかにもブンデスリーガの運営や地位向上のための様々な役割を果たしているが、その中でも最も重要な任務は、このリーガライセンスの交付ということになる。このDFLによって管理されるリーガライセンス規定により、ブンデスリーガ1部2部に所属する合計36クラブは、多岐に渡る条件を揃えたユースアカデミー(NLZ: Nachwuchsleistungszentrum)を保有することが義務付けられることとなった。なお、NLZを設立・維持する上で、以下の8項目が審査対象となる<sup>14)</sup>。

- ① ストラテジー<sup>15)</sup>とファイナンスについて
- ② オーガニゼーションとその方法について
- ③ サッカー選手を育てる組織としての在り方について
- ④ 学校などの支援体制について
- ⑤ 従事するスタッフ構成やそのクオリティについて
- ⑥ 内外に対してのコミュニケーション体制や様々な提携組織との関係性について
- ⑦ インフラストラクチャー整備について
- ⑧ 所属選手の成長に関する成果について

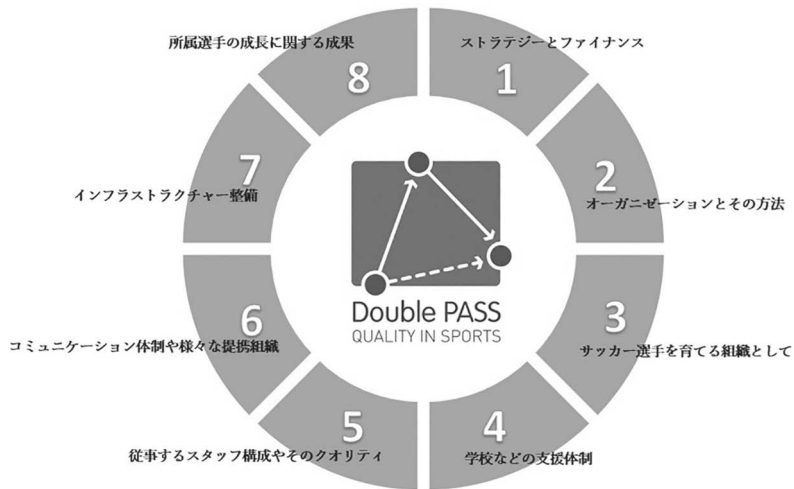
本研究では、これら諸条件の各項目についての説明は割愛することとするが、その中にある重要な条件の1つに注目したい。それは、学校等の支援体制という項目において、各クラブがDFBから認定を受けたDFBエリート学校(DFB Eliteschule)と提携することが義務付けられているということである。つまりDFLに属することになるブンデスリーガクラブが、DFBの認定を受けている学校と提携しなくてはならないということになる。

13) 1963年のブンデスリーガ創設以来、ブンデスリーガ参入条件を意味するリーガライセンス制度は存在していたが、DFL設立を契機に新たに多くの項目が増え、2007/08シーズンからはNLZについてはダブルパス DoublePASS社の協力により、より詳細まで審査されている。

14) DFBドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren "So funktioniert die Zertifizierung von Leistungszentren" <https://www.dfb.de/index.php?id=1006437>

15) ストラテジーとは直訳すると「戦略」となるが、ここではクラブ運営における方向性や計画性を指す。

図表1 ユースアカデミー設立の必須8項目



出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。

これによりどこのクラブも公平に審査されることになり、将来性を秘めたタレント選手は、自分が所属するクラブが提携している学校に通うことで、学校側とクラブ側からの十分なサポートを受ける環境を提供されることが保証されるようになった。

### 3. DFB エリート学校

ここでDFB エリート学校についての規定を明確にしていくが、前提として先行研究でも示したように、ドイツには様々な教育形態が存在し、現在はそれがさらに多様性を深めている段階にあることを踏まえなくてはならない。また、エリート学校という表現から、サッカーのエリートだけを育成する学校のように勘違いされがちだが、一般の学生も多く通っている普通の学校が、DFB が求める基準を満たすことで認定を受けるということを忘れてはならない。また、DFB から認定を受けることができる学校は、基礎学校以降(5クラスから)となるため、原則的には11歳以上の子供たちのための学校が対象となっている。さらにDFB エリート学校は男子だけではなく、女子のために申請して承認されているケースも存在する。

#### (1) 提携モデルの確立

NLZ に所属する選ばれたトップレベルのタレント選手にとって重要なことは、学校、地域サッカー協会、クラブの3つが、理想的な提携モデルを確立することである。その中でも学校の最大の役割は、トップレベルのトレーニング環境の中で優れた指導を受けてい

るタレント選手に対し、同時に将来の職業の可能性を最大限に広げられる教育を受ける環境を提供することである。NLZに所属し、そのクラブが提携する学校に通うことで、彼らの成績や進行状況を多方面から管理するだけでなく、クラブ側には必要に応じて宿題のサポートや、補習をすることも求められる。場合によっては、学校側に試験の日程をフレキシブルに対応することが求められることもある。タレント選手が安心して学業とスポーツに打ち込める環境を整えるためにも、(地域サッカー協会を含めて)三位一体となって密に連携を取り合いながら情報共有していかなくてはならない。

日本でもドイツでも同様のことが言えるが、いかに育成年代でサッカーの競技能力が優れていても、将来サッカー選手として成功する選手は、その中のほんの一握りに過ぎない。だからこそ、彼らの将来的な可能性を広げるための環境を整備することは、タレント選手を預かるクラブ側が負わなくてはならない当然の義務である。しかしそれをそれぞれのクラブの裁量に任せると、受け取り方によってその環境に差が生じる可能性が非常に高くなる。そこでドイツでは、DFLとDFBが主導する形で、各クラブと連携してこの仕組みを作り上げている。

日本でも学校によっては文武両道をモットーとし、それを実現しているケースはいくつも存在する。しかし残念ながら日本全体では、若くして競技力に優れた学生は、推薦などにより特待生という形で進学が可能であり、スポーツに特化した学生時代を過ごしてしまうことも少なくない。この側面から考えるとドイツの場合、トップダウンによりタレント選手にとってスポーツと学業を両立するために必要な環境が整備されていることになる。

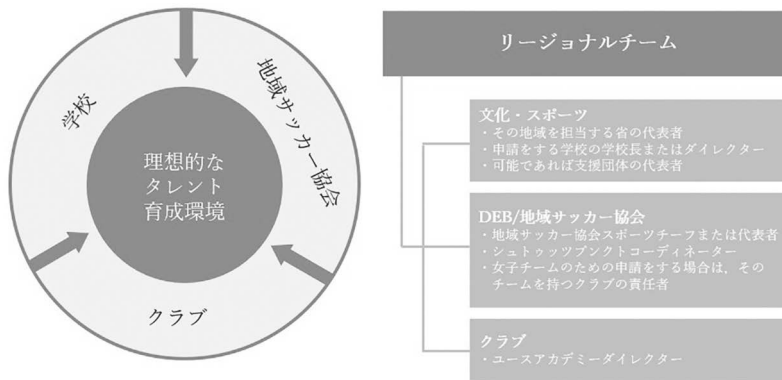
## (2) DFB エリート学校の認定

このDFB エリート学校としての承認を受けるための申請には、いくつかの手順が必要となる。全てにおいてまず、学校、クラブ、地域サッカー協会によって構成される「複合システム (Verbundsystem)」を立ち上げなくてはならない。その上でそれぞれの機関の代表者からなる「リージョナルチーム (Regionalteam)」を結成し、承認に必要な申請を進めていくことになる。具体的な構成メンバーとしては、教育界からは、その地域の文化・スポーツ省の代表者、申請をする学校の学校長または学校ダイレクターらに加えて、可能であれば支援団体の代表者も加わることになる。またクラブとしては、NLZを設立するクラブの代表者が、そして地域サッカー協会からは、その協会の代表者及び、シュトゥッツプункト<sup>16)</sup>のコーディネーターが含まれる(女子チームのための申請をする場

---

16) シュトゥッツプункト Stützpunkt は、DFB が2002年からドイツ全国の366ヶ所に設置しているスカウティングポイントのことで、さらにその上には29人のシュトゥッツプункトコーディネーター Stützpunktkoordinator が置かれている。

図表2 リージョナルチーム



出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。

合は、そのチームを持つクラブの責任者も含む) (図表2を参照)。

また、このリージョナルチームを潤滑に機能させるために、プロジェクトリーダーの役割を担うスクールコーディネーターというポストが用意されることもある。そしてこのリージョナルチームが中心となり、下記の18項目の審査基準を揃えた上で、DFBに申請を出すことになる<sup>17)</sup>。

- ① 学校委員会 (Schulkonferenz) が競技志向の学生に対する学校でのスポーツ促進を行う決定をすること
- ② 育成年代 (場合によっては女子チームも含む) のためのNLZとの関係性を持つこと
- ③ 全ての関係組織の代表者が属する方向性を示す委員会として「リージョナルチーム」を結成すること
- ④ 全ての関係する組織からのファイナンスやオーガニゼーションにおけるサポートを確証すること
- ⑤ 学校授業の時間割の中に、追加トレーニングを行う時間を確保すること
- ⑥ トレーニングに関するオーガニゼーション、内容、負荷等について、学校、クラブ、地域サッカー協会から同意を得ること
- ⑦ タレント促進の競技的ガイドラインとしての育成フィロソフィーの方向性を明確にすること

17) Eliteschule des Fußballs: Leitfaden für die Ausbildung [https://www.lfv-m-v.de/fileadmin/user\\_upload/dateien/talentfoerderung/Leitfaden\\_Eliteschule.pdf](https://www.lfv-m-v.de/fileadmin/user_upload/dateien/talentfoerderung/Leitfaden_Eliteschule.pdf)

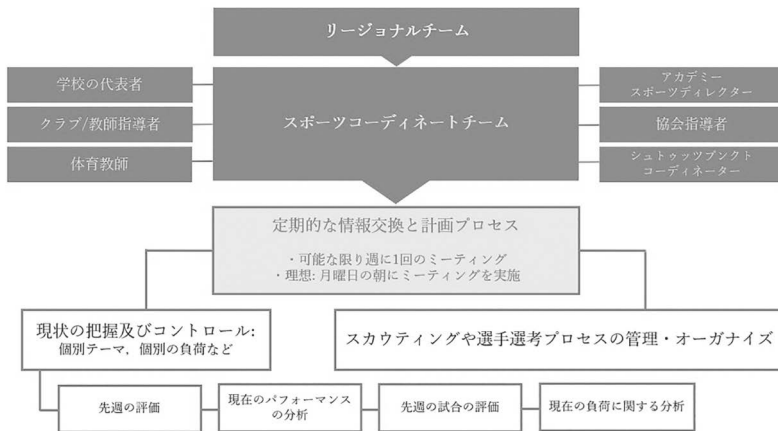
- ⑧ スポーツ関係により授業を欠席する際、学校での授業のフレキシブルな対応をすること
- ⑨ (スポーツ科学に基づいて) 選手のクオリティや能力を査定することができること
- ⑩ サッカーの授業のためのクオリティとライセンスを有する指導者を確保すること
- ⑪ サッカーの授業のためにプロクラブからコーチを派遣すること
- ⑫ (サッカーだけに限らず、他の競技スポーツも含めて) 競技志向の生徒を対象としたスポーツの授業を提供すること
- ⑬ クラブ、学校、住んでいるところの距離的な繋がりを密にすること
- ⑭ 学校外でのサポートをすること
- ⑮ 適したスポーツ施設を充実させること (室内と屋外のスポーツ施設等)
- ⑯ (ほかのタレントらの育成に協力するために) その地域の DFB シュトゥットガルトと提携すること
- ⑰ 提携パートナーとの定期的な情報交換を行うこと
- ⑱ 地域の学校教員らの育成のための研修に協力すること

この申請は、厳密には複合システムからクラブ及び学校がある各連邦州の文化省へ提出され、文化省から DFB へ提出される手順となる。つまり DFB エリート学校としての認定を受けるためには、州レベルでの認知と支援も不可欠ということになる。

なお、既述のようにドイツには、16 州でそれぞれ学校制度に違いがあるため、それぞれの地域性を容認するフレキシブルさがあることがポイントである。この認定を受ける学校はギムナジウムや総合学校のケースが多いが、中には実科学校やバレーフスコレック (本文 133 ページ参照) などの場合もあり、ここにもフレキシブルさが表れていると言える。

この 18 項目の審査基準を理解することは非常に重要であるが、この詳細に言及すると膨大な資料となる。そのため本研究では、各項目についての細かい説明は割愛するが、その後は DFB による厳しい審査の後、最終的に DFB より DFB エリート学校としての認定を受けることになる。この認可が下りると、リージョナルチームは DFB より補助金を受け取ることができる。男子及び女子のための条件を揃えた上で認定を受けた場合は年間で 4 万 5 千ユーロ、どちらか一方のためだけの場合は、年間で 3 万ユーロが分配される。この補助金の用途については、各リージョナルチームの判断に任されることとなるが、当然タレントの育成のために使われることになり、全ての用途等の記録は 1 年ごとの報告書にまとめられ、DFB に提出される。また 3 年ごとに、この 18 項目が維持できているかどうかについて再審査が行われ、引き続き承認するか、認可を取り下げるかが判断されることになる。

図表3 スポーツコーディネーターチーム



出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。

### (3) スポーツコーディネーターチーム

DFB エリート学校の認可を受けた学校は、必ず NLZ と提携をしていることになるが、それらの関係性を管理する仕組みが複合システムであり、実際に集まって活動する組織がリージョナルチームということになる。ただし、リージョナルチームの集まる機会は年に1回であり、実際にはリージョナルチームの下で実務的に機能する「スポーツコーディネーターチーム (sportliches Koordinierungsteam)」が存在する (図表3を参照)。

スポーツコーディネーターチームには、学校の代表者 (場合によっては学校サッカーコーディネーターなど、この提携のための担当者を用意していることもある)、クラブからまたは学校から実際に指導に当たる指導者、体育教師、NLZのスポーツディレクター、管轄の地域サッカー協会指導者及び、シュトゥツプンクトコーディネーターらが含まれており、毎週月曜日の朝に情報の共有を行い、それぞれのタレント選手らの個別の負荷を考慮した上で、毎日のトレーニングの目標に沿って、学校、クラブ、地域サッカー協会間で、彼らのトレーニング時間の詳細な調整とコーディネーターを行うことになる。全ての担当者が一同に介することは理想だが、毎週ミーティングを開かなくても、情報の共有をすることが重要なポイントとなる。

またこれに加えて、新しいタレント選手をスカウティングしたり、そのための選手選考のプロセスについても話し合われることになる。事前に学校、クラブ、地域サッカー協会が三位一体となって受け入れ態勢を確認しておくことで、クラブは新しくNLZに加わる可能性のあるタレント選手に対し、サッカー環境だけではなく、将来のキャリアサポートに対してどのような準備ができるかを説明することができる。そういった環境条件を整え

ることは、タレント選手を獲得する上で、非常に重要な要素となる。

さらに、こういった整った体制の中でタレント選手の育成を行っていることを、それぞれの地域サッカー協会がしっかりと把握することで、その情報は当然DFBでも共有されることとなる。それはドイツ国内の可能な限り全てのタレント選手を取り巻く状況を、DFBが限りなく正確に管理していくことができることを意味している。

#### (4) DFB エリート学校の利点

NLZが提携する学校に通っていることの最大の利点の1つに、午前中にトレーニングを行うことができることが挙げられる。図表4はU14からU17に所属している選手らの1週間のタイムスケジュールの事例となるが、月曜日・水曜日・金曜日の午前中に学校の施設内でトレーニングを行う時間を確保することができている。

この時間は、ほかの一般の生徒は選択授業という形で別の教科を選択しているため、NLZ所属の選手らは、その時間を利用してサッカーのトレーニングを行うことができる。場合によっては早朝にアカデミー施設を使ってトレーニングを行い、その後にシャトルバスなどで学校へ送迎するという形を取ることも有り得る。また、この午前のトレーニングのあとには、必ず栄養を取らせるために、朝食が用意されることになる。

また、学校の授業が終了したのち、夕方のチーム練習が始まるまでに、宿題のサポートを受ける時間が設けられている。これは選手の意見も反映され、1人でも宿題や課題ができる選手には、無理強いをすることは決してないが、成績不振になりそうであったり、宿題の量が多いために自宅では終わらない可能性がある選手には、NLZにてトレーニングまでの時間に勉強を見てくれるスタッフ（家庭教師）を、NLZが用意することになる。

図表5はあくまでも目安ではあるが、U12/U13からU18/U19までのNLZ所属の選手が、学校とNLZで受けることができるトレーニング時間とその内容を表している。この

図表4 7クラス-10クラス（U14-U17）の1週間のスケジュール例

月	火	水	木	金	土/日
トレーニング @学校		トレーニング @学校		トレーニング @学校	トレーニングや 試合日程に合わ せて個別のブラ ンニング
学校	学校	学校	学校	学校	
13:00-14:00 昼食休憩					
14:00-16:00 宿題サポート					
トレーニング @NLZ/ シュトゥツプ ンクト	トレーニング @NLZ	トレーニング @NLZ	トレーニング @NLZ	トレーニング @NLZ	

出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。



図表5 年齢別の負荷指数とトレーニング内容別の割合

		U12/13 (5/6クラス)	U14/15 (7/8クラス)	U16/17 (9/10クラス)	U18/19 (11/13クラス)
年齢別の1週間の負荷の時間数	午前練習	1.5時間	3時間	3時間	3.75時間
	スポーツ授業	3時間	2.25時間	2.25時間	1.5時間
	午後トレーニング(クラブ)	6時間	7時間	8時間	9時間
	試合	1.5時間	2時間	2.5時間	3時間
	合計時間	12時間	14.25時間	15.75時間	17.25時間
年齢別の1年間の負荷の時間数	午前練習	70.5時間	141時間	141時間	176.25時間
	スポーツ授業	132時間	99時間	99時間	66時間
	午後トレーニング(クラブ)	282時間	329時間	376時間	423時間
	試合	52.5時間	80時間	112.5時間	125時間
	合計時間	537時間	649時間	728.5時間	790.25時間
年間の中でのトレーニング内容の割合と時間数(午前午後合わせて)	コンディショニング/フィットネス	10% - 35時間	15% - 70時間	20% - 103時間	20% - 120時間
	テクニク	30% - 108時間	25% - 118時間	20% - 103時間	20% - 120時間
	戦術(個人+グループ)	20% - 70時間	20% - 94時間	20% - 103時間	20% - 120時間
	試合/フォーメーション	40% - 140時間	40% - 188時間	40% - 208時間	40% - 240時間

出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。

ようにして、学校とNLZがしっかりと情報共有しながらカリキュラムを考えることは、タレント選手らにとって合理的で理想的な指導を受けることができることを意味している。

### Ⅲ フォルトゥナ・デュッセルドルフの事例

この章では、筆者が所属しているブンデスリーガ1部クラブであるフォルトゥナ・デュッセルドルフと、その複合システムを事例として取り上げ、これまでの説明をより具体化させることとする。

#### 1. NLZ 設立までの経緯

##### (1) クラブの低迷期

2000年の欧州選手権での敗退を契機に、育成改革に向けて大きく舵を切ったドイツサッカー界だったが、ドイツサッカーの低迷とシンクロするように、1990年代後半から2000年初頭のフォルトゥナは、クラブの歴史上最も不遇の時代を過ごしていた。1998/99シーズンにブンデスリーガ2部からアマチュアリーグへの降格が決定し、当時4地区に分かれていた3部リーグ相当のレギオナルリーグ・ヴェスト・ズードヴェスト (Regionalliga West Südwest) に所属することとなった。2001/02シーズンにはこの3部リーグのカテゴリーが2地区にまとめられ、フォルトゥナは引き続き3部リーグ相当のレギオナルリーグ・ノルド (Regionalliga Nord) に所属することができたが、このシーズンにさらに降格を経験し、2002/03シーズン、2003/04シーズンは、当時の4部リーグ相当であるオーバーリーガ (Oberliga) に身を置くこととなった。かつてドイツ杯を連覇したこともある伝統クラブにとって、まさに正念場と言える時代だが、ここから再建をかけた取り組みがスタートすることとなった。

図表 6 1990年代後半から2000年初頭の所属リーグおよび順位の推移

シーズン	所属リーグ	リーグカテゴリー	順位
1996/97	ブンデスリーグ	1部リーグ	16
1997/98	ブンデスリーグ2部	2部リーグ	7
1998/99	ブンデスリーグ2部	2部リーグ	18
1999/00	レギオナルリーグ・ヴェスト・ズードヴェスト	3部リーグ	6
2000/01	レギオナルリーグ・ノルド	3部リーグ	16
2001/02	レギオナルリーグ・ノルド	3部リーグ	17
2002/03	オーバーリーグ	4部リーグ	8
2003/04	オーバーリーグ	4部リーグ	2
2004/05	レギオナルリーグ・ノルド	3部リーグ	8
2005/06	レギオナルリーグ・ノルド	3部リーグ	5
2006/07	レギオナルリーグ・ノルド	3部リーグ	10
2007/08	レギオナルリーグ・ノルド	3部リーグ	3
2008/09	ドリッテリーグ	3部リーグ	2

出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。

そして2004/05シーズンから4年間は、当時の3部リーグに相当するレギオナルリーグ・ノルドに在籍し、その後2008/09シーズンには新設されたドイツ3部リーグのドリッテリーグ (Dritte Liga) に組み込まれ、このシーズンで2位になったことで、10年振りのブンデスリーグ2部復帰を果たす権利を得ることとなった (図表6参照)。

### (2) デュッセルドルフ市によるスポーツ教育の促進プロジェクト

フォルトゥナが再建を開始した2003年頃、時を同じくしてデュッセルドルフ市は、学校教育と競技スポーツの環境を改善するためのプロジェクトをスタートさせていた。これにより2007年には、のちにフォルトゥナと提携し、DFBよりDFBエリート学校としての認定を受けることとなる a. レッシング・ギムナジウム (Lessing Gymnasium) が、ノルドラインヴェストファーレン州 (NRW) 最初のスポーツ学校として認定を受けることになる。またこれに続いて、こちらものちにDFBエリート学校としての認定を受ける b. フルダ・パンコック総合学校も、同様に NRW よりスポーツ学校としての認定を受けることとなった<sup>18)</sup>。

### (3) NLZ 設立へ

成績としてはブンデスリーグ2部昇格が可能となったが、ここでフォルトゥナはDFLからリーグに所属するためのライセンスを取得するために、様々な分野において条件を揃

18) わかりやすくするため、(DFBより認定を受けたDFBエリート学校2校を含む) フォルトゥナの提携学校4校を a.-d. で区別する。

える作業を行うこととなる。NLZ の設立もその条件の 1 つに含まれており、それに付随して提携する学校も、DFB エリート学校としての認定を受ける必要があった。

そこで DFB エリート学校の認定を受けるために、ニーダーラインサッカー協会 (Fußballverband Niederrhein) と a. レッシング・ギムナジウム、b. フルダ・パンコック総合学校とともに複合システムを立ち上げ、それぞれの代表者らとともに、リージョナルチームとして条件を満たすための準備を進めることとなった。このときフォルトゥナは、NLZ を立ち上げるに当たり、ハンブルガー SV (Hamburger SV) で NLZ に従事していたマルコス・ヒルテ (Markus Hirte: 現在はドイツサッカー協会タレント育成スポーツダイレクター) を招聘し、彼の経験とともに申請の作業を進めることとなった。

その後、2010/11 年度に正式に両校と提携学校としてのパートナーシップを結び、さらに 2011/12 年度には、c. レオ・スタッツ・ベルーフスコレック (Leo-Statz-Berufskolleg) と d. マーティン・ルター・キング総合学校 (Martin-Luther-King-Gesamtschule) もフォルトゥナの複合システムに加わることとなった。そして最終的には、2013/14 年度に a. レッシング・ギムナジウム総合学校と b. フルダ・パンコックが、DFB より DFB エリート学校としての認定を受けることとなった。なお、c. レオ・スタッツ・ベルーフスコレックと d. マーティン・ルター・キング総合学校も、引き続きフォルトゥナの提携学校となっている。

この一連の事実から、DFL は新しくブンデスリーガ 2 部に昇格するクラブへのライセンス発行について、条件を満たすために一定の猶予期間を与えてくれていることがわかる。2009 年時点でのフォルトゥナは、提携する学校が DFB エリート学校としての承認を受けるまでの中長期的な計画を示したことで、ある程度の猶予期間を与えられ、それをのちに証明することとなった。なお、フォルトゥナにとっては、デュッセルドルフ市が 2003 年から学校教育と競技スポーツの環境を改善するためのプロジェクトをスタートさせていたことが、準備を進める上で非常に大きなアドバンテージになったことは間違いない。

#### (4) フォルトゥナの複合システムの特徴

既述の通り、ドイツは 16 州それぞれの特色があるため、複合システムやリージョナルチーム、コーディネーターチームにも、少しずつフォームや構成メンバーに違いがある。フォルトゥナの場合、大きなポイントとして提携している学校が合計で 4 校あり、それぞれの学校が複合システムに属している。そのうち 2 校が DFB エリート学校の認定を受けているが、厳密には DFB からはそのほかの 2 校も含めて、フォルトゥナの複合システムとして評価されていることになる。また、それぞれの学校の代表者がリージョナルチームの一員ではあるが、1 つの学校ごとを別々に管理することができないため、フォルトゥナ

ではスクールコーディネーターであるラッシュを中心にオーガナイズしている。

ラッシュはフォルトゥナのスクールコーディネーターとして、学校関係の全てのプロジェクトの責任者を担っている。通常はb. フルダ・パンコック総合学校に常駐しており、1週間のうちにa. レッシング・ギムナジウム、c. レオ・スタッツ・ベルーフスコレック、d. マーティン・ルター・キング総合学校を周りながら、それぞれの学校に所属している選手たちの状況を、担当の教師らと確認する作業を行っている。また、それぞれの学校で午前中のトレーニングを担当するコーチも、主にフォルトゥナ NLZ スタッフから手配し、彼らとの情報共有を行っている。

ラッシュの給与はフォルトゥナから半分、DFB からリージョナルチームに分配されている3万ユーロから半分が捻出されており、b. フルダ・パンコック総合学校からは支払われていない。それでも彼自身がb. フルダ・パンコック総合学校に通っている選手たちのサッカーの授業を担当することもあり、学校の中でもしっかりと認知された存在であるのは興味深い。

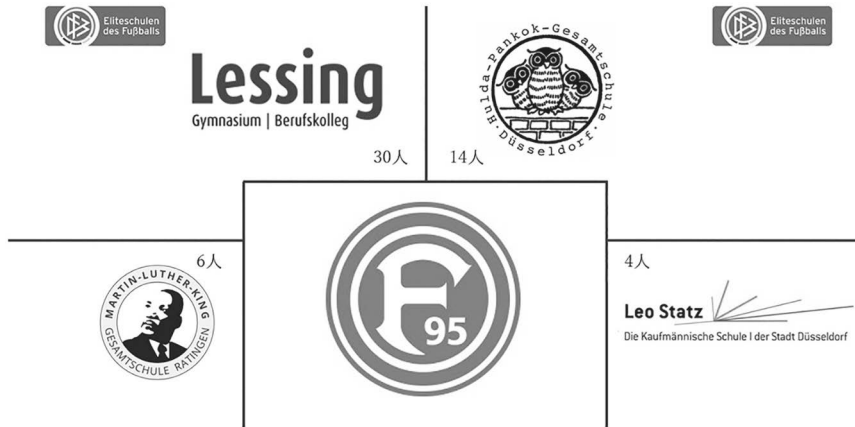
## 2. フォルトゥナ NLZ 所属選手の提携学校での就学状況

NLZでプレーする全てのタレント選手がDEB エリート学校に通っているのかというと、実はそうではない。あくまでもそれは選手個人（家庭）の判断が最優先されることになるため、わざわざ転校することを好まなかったり、元々学業のできる学校に通っている選手は、フォルトゥナのNLZに所属していても、DEB エリート学校や提携学校に通っていないというケースもある。しかしそれにより、例えば遠征に行くために学校を休む場合でも、選手本人が自分の通う一般の学校に申請を出して許可を取らなくてはならず、また授業の遅れや補習、宿題、レポート等も、全て自分でリスクマネジメントしなくてはならない。

そういう面でもNLZが提携している学校に通っていることで、スクールコーディネーターがその部分のコーディネートを請け負ってくれるだけでなく、補習を準備したり、宿題やレポートのケアはクラブ側が家庭教師を用意するなど、万全の体制でケアをしてくれるため、学年が上がってくる中でNLZの提携する学校に通うことの利点を感じるようになる選手は、転校を選択することも少なくない。

現在（2018年8月初め時点）フォルトゥナのNLZには、U9、U10、U11、U12、U13、U14、U15、U16、U17、U19、U23の11チームが存在し、全部で203人の選手が在籍している。そのうちU23チームに所属する選手20人は全員19歳以上であるため、フォルトゥナNLZが提携する4つの学校に通っている選手は存在しない。それ以外の選手たちのうち、約30%に当たる54人の選手がいずれかの提携学校に通っている。なお、その内

図表7 フォルトゥナNLZの提携する4つの学校に通っている選手の内訳



出所) DFB ドイツサッカー協会ホームページ: Talentförderung/Leistungszentren を参考に筆者作成。

訳は以下の通り。

- a. レッシング・ギムナジウム (DFB エリート学校) : 30 人
- b. フルダ・パンコック総合学校 (DFB エリート学校) : 14 人
- c. レオ・スタッツ・ベルーフスコレック : 4 人
- d. マーティン・ルター・キング総合学校 : 6 人

この 54 人の選手については、成績はもとより出席率やそのほか詳細に渡ってラッシュが情報を管理しており、ほとんどの選手が成績優秀者となっている。

この 30% という数字が必ずしも多くない理由はいくつかあろうが、その 1 つの要因として考えられることは、フォルトゥナはクラブの方針として、可能な限り自宅から通える範囲内からタレントを発掘・育成することを目指しているため、通い慣れた自宅近くの学校を選択し続ける選手が少なくないという点が挙げられる。ただし、上級のチームに所属するようになるにつれ、クラブと学校の調整が必要となるケースが増え、また年代別の代表チームに選ばれるようになる選手にとっては、やはり NLZ が提携する学校に通うことのアドバンテージは大きくなる。ドイツ中から選手を集めてくるようなトップクラブの NLZ では、寮を完備し、提携する学校に通うしか選択肢がないため、自ずと提携学校に通う選手の割合は大きくなる傾向にあるが、それはクラブの方針や規模が、少なからず影響すると言えよう。

そんな中、この研究のヒアリングを行っているタイミングで、U16 チームに所属する選手が 1 人、学校の成績が少し下がっているため、2 週間全体練習に参加することが禁止されるというケースに遭遇した。彼は学校が終わった後に b. フルダ・パンコック総合学校

から送迎バスでNLZ施設に来たのち、U16チームが全体練習を行っている時間に、クラブが用意した家庭教師とともに学校から出された宿題をやることになっていた。また宿題を終わらせた後は、別途この選手のための個別メニューが組まれており、ラッシュがそのトレーニングを担当することになっていた。

結局この選手は2週間の補習サポートを終え、一定の成績を収めることができたことで、チーム練習に復帰となった。このケースからもわかるように、クラブと学校が情報を共有し、それをスクールコーディネーターが把握・管理していることで、選手は学校の成績を蔑ろにすることはできず、それが低下した場合には、適切な対応を取られることになる。全体練習への参加が禁止されている期間も、選手のパフォーマンスが低下しないように個別のメニューを組み、1人のコーチが対応に当たるといったサポート体制は、逆に特別待遇を受けていると考えることもできる。それくらいタレント選手を預かっているクラブ側には責任が伴うということなのだろう。

### 3. フォルトゥナ育成改革がスタート

NLZを所有するクラブは、3年周期でDFL/ダブルパス社から、NLZの状況を審査されている。これにより最終的に最大で三ツ星評価まで受けることになるが（最高が三ツ星、最低は星なし）、ブンデスリーガ2部昇格1年目となった2009/10シーズンのフォルトゥナは、まだ提携学校の中にDFBよりDFBエリート学校としての認定を受けている学校がなかったこともあり、審査を終えた後の2010/11シーズンに下された判断は星なしというものだった。

その後フォルトゥナは、2012/13シーズンには1年で再び2部リーグ降格となったものの、15年振りの1部リーグも経験している。そして2018/19シーズンに再昇格を果たすまでの5シーズンは、浮き沈みを繰り返しながらも2部リーグ所属を維持してきた。その中でフォルトゥナは、今後のクラブの将来性を考えていく上で、NLZへの注力を進めることが最重要課題と考えるようになった。ドイツサッカー界自体は、2000年にこの問題に直面し、舵を切ったことになるが、フォルトゥナはそこから10年以上遅れて、ようやく育成環境の改善に目を向けるスタート地点に到達したことになる。そこから着実にソフト面の改善を進めた結果、2013/14シーズンに一ツ星、2014/15シーズンには二ツ星を獲得することとなった。そして2018/19シーズンには、NLZとしては最高評価でもある三ツ星の評価を受けることに成功している<sup>19)</sup>。

---

19) 獲得星数1つの場合は16万ユーロ、2つの場合は26万ユーロ、3つの場合は36万ユーロがDFLから育成補助金として支給される。

この大きな成功には、2016年3月に39歳という若さでクラブの会長に就任したロベルト・シェーファー（Robert Schäfer：以下、R.シェーファーと省略）と、2016年9月にユースアカデミーダイレクターに就任したフランク・シェーファー（Frank Schaefer：以下、F.シェーファーと省略）の存在が大きく影響している。R.シェーファーは、フォルトゥナの会長に就任する以前は、ダイナモ・ドレスデン（Dynamo Dresden）、TSV 1860 ミュンヘン（TSV 1860 München）でジェネラルマネージャー（Geschäftsführer）を歴任してきたが、そのどちらのクラブでもNLZに関しての改善・発展において手腕を発揮し、大きな評価と経験を得てきた。またF.シェーファーは、1982年から1.FCケルン（1.FC Köln）で指導者の道を進み始め、1997年から2003年にバイヤー04レヴァークーゼン（Bayer 04 Leverkusen）のU19チームを率いた時代を含めて、育成年代の全てのカテゴリーの指導を経験したのち、トップチーム（当時ブンデスリーガ1部）でも監督、コーチ、スポーツダイレクターを歴任した経歴を持っている。そしてその後再び育成年代での役職に戻り、2013年から2016年はNLZのダイレクターとして従事し、その後にフォルトゥナで同様のポストに就くこととなった。

この2人がフォルトゥナに加入後は、積極的にNLZ所属タレント選手をトップチームに引き上げることを目指したほか、NLZの人員整理をしながら、フルタイムのスタッフを増やすことにも注力した。また、NLZだけのために、最新の設備を搭載した新しいユースアカデミーセンターの建築を決断し、着工に踏み切ることとなった（図表8）。

この構想は、すでにフォルトゥナの中に数年前からあり、これを実行に移すために、NLZに関してのエキスパートでもあるこの2人がフォルトゥナの要職に就くこととなったという背景も存在する。2018年末に完成予定のこの新しい施設は、総工費約700万ユーロを費やして作られているが、この施設が完成することは、ドイツでも屈指のサッカー激

図表8 NLZユースアカデミーセンター（完成予定図）



戦地区である NRW の中でも、タレントを引き抜かれぬ充実した環境を整備できることを意味している<sup>20)</sup>。

#### 4. フォルトゥナ NLZ を取り巻く問題点

フォルトゥナにおける育成環境は、10年前に2部リーグに昇格した当時と比較すると、飛躍的に改善されてきた。2018/19 シーズンに NLZ として最高評価である三ツ星を取得するまでの成長を遂げたことは、クラブのこれからのためにも大きな意味を持つことになることは疑いの余地がない。しかし三ツ星評価を受けているクラブはすでに多数あり、決して最上級のクラブになったわけではない。チャンピオンズリーグやヨーロッパリーグに毎年出場するボルシア・ドルトムント (Borussia Dortmund) や FC シャルケ 04 (FC Schalke 04)、バイヤー 04 レヴァークーゼンやボルシア・メルヒェングラッドバッハ (Borussia Mönchengladbach) などといった強豪クラブが半径 100 km 以内にひしめいているこの地域では、むやみに大きなエリアヘスカウティングの目を向けるのではなく、ホームタウンであるデュッセルドルフ (61 万人都市) にしっかりと注力し、その中でタレントを発掘し、エリートに育て上げていく必要がある。

しかし残念ながら、育成年代でもそういった近郊の強豪クラブから引き抜かれることもしばしば起こっているのが現状である。その場合、フォルトゥナの提携している学校に通っているタレント選手が、翌シーズンから近郊の別のクラブの NLZ 所属になるというケースが生じてしまう。当然移籍した先のクラブの NLZ も提携している学校があるが、通える距離であることから転校をしないという判断を下す家庭も出てきてしまう。そうなったときに、その選手をこれまで同様フォルトゥナ NLZ のタレント選手たちと同じように、午前中のトレーニングに参加させるのかどうかの判断を迫られることになる。提携学校での午前中に行われるサッカーのトレーニングは、大概フォルトゥナ NLZ のコーチスタッフが指導に当たるが、結果的に別のクラブの NLZ 所属タレント選手の指導もすることになってしまう。フォルトゥナでは現時点ではこういったケースの場合、“デュッセルドルフ出身の選手である”ことを尊重し、別のクラブに移籍してしまったとしても、本人が望むのであれば、これまで同様午前中のトレーニングに参加させている。しかし問題点としては、このタレント選手についての細かいケアは移籍先のクラブの NLZ が対応する義務があり、フォルトゥナの提携している学校は、その新しいクラブの NLZ と密にコン

---

20) NRW には 2018/19 シーズンはブンデスリーガ 1 部 5 クラブ、ブンデスリーガ 2 部 5 クラブ、ドリッテリーガ 4 クラブの合計 14 のプロサッカークラブがあり、ドイツでも最もサッカーのレベルが高い州となっている。



タクトを取り合う必要がないため、本来の目的であるはずの、タレント選手にとって学業とスポーツを両立できる環境を整えるという趣旨を満たせなくなってしまう可能性が生じている。

またこれに似たケースとして、フォルトゥナのNLZ内で内部昇格ができず、次のシーズンからはフォルトゥナを離れて、近くの町クラブでプレーすることになってしまうタレント選手の扱いについての問題がある。当然フォルトゥナもプロクラブであるため、一度ユニフォームを着ることができたからといって、エスカレーター式に下から上まで上がっていけるわけではない。そこには毎年セレクションやスカウトを経て新しいタレント選手が入ってくることになり、何人かは次のチームに進めないケースも生じてくる。このときに、それまでフォルトゥナNLZ所属として午前のトレーニングに参加していたタレント選手については、そこで切り捨てることはせず、本人が希望すれば午前トレーニングには参加できるようにしている。

この午前のトレーニングは、大概が提携している学校内のスポーツ施設を使って行われるが、フォルトゥナNLZのグラウンドで行われることもある。その場合タレント選手は、早朝に学校ではなくフォルトゥナNLZに集合してトレーニングを行い、その後用意された朝食を摂って、送迎バスで学校へ登校することになる。なお、現在フォルトゥナでは、この移動の部分の手間を省けないかを検討しており、学校の教師側がNLZに来て授業をするという逆の体制を確立することができないかを模索しているが、これはまだ多くの問題があり、実現には至っていない。

## 結——総括から今後へ

かつてW杯を3度制し、名実ともにサッカー王国であったドイツでも、2000年の欧州選手権での大敗をきっかけに、それまでの自分たちの考え方やシステムを見直し、大改革を断行する決断を下すこととなった。そして実際に4度目のW杯制覇を達成した2014年を1つの目に見える成果とすると（これによりFIFAランキング1位も獲得）、そのため実には14年に及ぶ歳月を費やしたことになる。しかし連覇に大きな期待が懸かった2018年のW杯では、予期せぬグループリーグ敗退という不本意な結果となってしまった。その要因はいくつか考えられるが、その中で育成改革の流れからその原因を探るとするならば、あまりにも統制の取れた育成プログラムを確立してきたために、非常に高いアベレージの選手が多く生み出されてきた反面、苦しい状況を打開できる圧倒的な個性、具体的にはストライカーの存在が欠如してしまったということが考えられる。この問題はドイツでも何度も議論のテーマに挙がってきたが、結局解決には至らないまま、2018年を迎えてしまっていた。世界を代表するストライカーを育てるという次なる課題に、ドイツサッ

カー界がどのように向き合っていくのかは、日本サッカー界としても注目する価値があるだろう。

一方で、2017年U21欧州選手権での優勝や、同年の若手主体で挑んだコンフェデレーションカップでの優勝は、次の世代が着実に育ってきていることの証明であり、ドイツの育成改革の大いなる成果を意味している。今のドイツ代表は、余りある選択肢（選手）の中からいかに優れた代表チームを構成するかという、非常に贅沢な悩みを抱えていると言うこともできる。ブンデスリーガのレベルは年々上がっており、その中で次々に10代の選手がデビューしている。2018年のW杯に出場したドイツ代表メンバーの全てがNLZ出身者であり、NLZに加入した年齢の平均が10.13歳だったことからわかるように、ドイツのNLZは継続的に優れた選手を輩出しており、その点は大いに評価に値するであろう。

日本のサッカーに関する育成環境は、長らく学校の部活動がその大半を担ってきた。それは紛れもない事実であり、日本のサッカーの基盤がそこから作られてきた。しかし全国高校サッカー選手権大会などが多くのメディアの注目を集める存在であることで、本来青少年の教育の場であるべき部活動が、ときにその範疇を超えた存在になっていることもまた事実である。全国大会に出場するような強豪校は、推薦で競技力の高い選手を集めるケースが多く、またそういった部活動チームには部員が100人以上所属していることも少なくないが、これにより多くの補欠部員が多く生まれてしまうことは否めない。当然この点については長らく多くの関係者の中でも問題視されてきた。現在では1つの部活動であっても、レベルに合わせて複数チームが登録できるというリーグ戦の仕組みは確立されてきた。しかしそこで疑問となるのは、同じ部活動（サッカー部）に所属している全ての選手が、ハードにおいてもソフトにおいても、同等の環境を与えられているのかという点である。そこは現実問題としてクリアできていないケースが多く、結果としてやはり指導者に見出されずに埋もれていくタレントがいるであろうことを否めないのが、今の日本の育成年代を取り巻く現状である。

そしてまた、一方では少子化の影響もあり、部員不足によりサッカー部として大会にエントリーできないというケースも存在する。多数の部員に均等なチャンスを与えることが難しい学校がある一方で、全く反対の問題を抱える学校もあるということになる。つまり現在の日本サッカーの育成環境は、誰にとってもフェアで、可能な限り充実した指導や教育を受ける仕組みが確立しているとは言い切れない。部活動を学校の課外活動の1つとして捉えることはできるが、それであればサッカーと学業の両立を保証することが、学校側の責務でなくてはならないはずである。これまでの日本では、育成年代において“サッカーに専念しすぎて学業を疎かにしてしまった”選手があまりにも多く生み出されてき

た。これを改善させ、サッカーの競技能力が高だけでなく、様々な能力を身に付けた社会性のある人材の育成を行っていくことが求められるであろう。

スポーツと学業の両立を推進していく上での指針を作ることが、今後の日本サッカー界においては非常に重要であり、また育成年代の選手たちができるだけ平等に出場機会を得る必要があるという意味では、大会にエントリーする際の学校単位という枠組みは、今後は崩れていくことも検討していくべきではないだろうか。現在は原則として、所属している学校の部活動チームでしか大会にエントリーできないが、それを変更し、他の学校の部活動チームに移籍できるようにしても良いかもしれない。それが出場機会を得る方法なのであれば、検討の価値はあるであろう。事実として現在では、選手数が足りない学校同士が合同チームを結成し、大会に出場することが認められている以上、学校の枠を飛び越えた移籍も1つの選択肢として排除するべきではない。

いずれにしても重要なことは、学校単位、クラブチーム単位の各自の判断に任せるべきではないということである。そのためには日本サッカー協会が全国の都道府県サッカー協会としっかりと連携を取り、それぞれの地域で環境整備を行っていくことが不可欠である。誰もがプロサッカー選手のセカンドキャリア問題を認識している以上、ファーストキャリアがスタートする前の“ゼロキャリア”の時期に、彼らにいかにより良い環境を提供するかをしっかりと考えなくてはならない。そしてこの課題に取り組むことは、日本全体のサッカー関係者のベクトルを整えることを意味するだけでなく、それがひいては日本サッカー協会の目指す“ジャパンウェイ”の基盤になるに違いない。

DFBとDFLが連携して長年をかけて作り上げてきた、学校、クラブ、地域協会の三位一体となった育成改革の取り組みは、これから日本の育成環境を改善する上で1つのヒントになるであろう。無論、ドイツのやり方が日本に100%適合するわけではなく、日本が作り上げてきた部活動の伝統を重んじた上で、新しいスタイルを模索していかなくてはならない。今後は日本のサッカー界から、これまで以上に素晴らしいサッカー選手が輩出されるだけでなく、社会人としても優れた人材を輩出できる仕組みを確立していけるようになることに期待したい。